

---

# マンホール

たい焼き

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マンホール

### 【Nコード】

N7651D

### 【作者名】

たい焼き

### 【あらすじ】

中学校二年生になった連は鎌倉見学に行くが、そこには普通よりも少し大きいマンホールがあった。そこには、予想もしていない過酷な迷路だった。人を殺す武器を持った連たちは果たして生き残る事ができるのか、そしてその先にあるものは……

## 不思議な扉

「次は鎌倉駅、次は鎌倉駅、お出口は右側です。」  
「みんな、ここでおりるぞ。」

彼は、鈴木連、頭が良くリーダー的存在でみんなをいつもまとめてくれ、運動神経も抜群。

いわゆるエリートといった感じだが、顔がイマイチかっこよくないのが欠点だ。でもクラスの人気者だ。

今日は、中学2年で1番の楽しみがこの鎌倉旅行だ。

班は、全員で5人おり、班長が連、副班長が女子の斎藤香奈

そして、西岡真希、田中健太、三浦隆志の男子3人女子2人の計5人が

鎌倉旅行1日と一緒に行動する班だ。

鎌倉駅におりてまず江ノ電を乗り、最初は有名の高徳院に向かつて出発した。連と香奈が先頭に立ち地図をお互いに見ながら

高徳院へ向かった。香奈は優しい性格で髪はショートで

顔が小顔になっておりクラスで1番もてる女であった。

連は中1のときから大好きで今日はいいところを見せようと気合が入っていた。

「ねえ香奈ちゃん、今どこでどんぐらいで着くの。」

連はわざと分からないふりをして話をすすめようと思った。

しかし、そこで邪魔が入った。そう、親友の健太がいきなり爆笑していたのだ。

「連、顔が真っ赤だぞ、香奈の事が好きなんだろ」

連は、顔が真っ赤になった。健太には香奈が好きってことを前から知っていたのでそのわざとらしいしぐさに健太はからかいながら笑い出し、ついに連が香奈の事を好きってことがばれてしまったのだ。

「健太冗談はやめろ。」

連は顔を真っ赤にしながら動揺をしていたからか、うまく言えずにいついかにしまった。

「あれ、なんでかんでるの、どうしようするなよ」

何ともいえない言葉だった。そんな時に初めて思った、友を信じるとろくな事ないことを。

さすがに気がついた香奈はそれっきり1度もこっちを向いてくれなかった。

すぐく健太がムカついて怒鳴りそうになったが、ここで怒鳴ってもますますからかわれるので我慢をしていた。

その後から、後ろの健太が真希と隆志にずっと連の話で盛り上がっていた。

そして、5、6分ぐらいで高德院に着いた。

「案外早く着いたな、ゆつくりするか。」

みんながはしゃいでた中にただ連は香奈と一緒に行動する事ができずに

ずっとテンションが下がったままだった。

そのときだった、見張りの先生がにやけながら、こっちへよってきた。

「おい、連いい事教えてやろうか高德院には大仏の中に入れることは知っているよな

まず、目をつぶって三步進むんだそして息を吸って吐いてを10回繰り返してまた3歩進むんだ

そうすると・・・いいことがあるぞ是非やってみなよ、ただし目を絶対に開けるなよ」

こういう話が大好きな真希は目で、本当？のサインを送り先生が大きく縦に首を振った。

「みんな、早く行こう！早く、いそいで！」

真希は本当に物好きでやろうと言いだしたら絶対にやると言う頑固なタイプなのはみんな知っていたので仕方なく大仏の中へと入っていた。

このときに連はものすごく嫌な予感がしていた。まるで帰ってこられないようになるような不安な気持ちだった。

そしてみんな目をつぶり、3歩みんな歩いた。1・2・3

「せーの」の合図でみんなが10回深呼吸した。そして・また前に1・2・3

目を開けた瞬間前にトビラがあつた、「なんだなんもないじゃん、先生にだまされたし、最悪」と真希がっかりしていた。だがなぜかおかしいのだ。たった6歩歩いただけなのに

大仏とは別のところへいった感じでしかも人が誰も居ないのだ。だが、仕方なく扉を開いた。

## 不思議な扉（後書き）

どうでしたか？

満足にいただけましたでしょうか？

不満な点やよかったところなどはぜひ教えてくださいませう。よろしくお願いします。

次をもっと良くしようと思しますので、  
応援よろしく願います。

## 始まり（前書き）

5人で鎌倉旅行にいった連は  
先生の一言で変な扉を見つけてしまった。  
その先にあるものは・・・

## 始まり

“ギー”

扉をおそるおそる開いてみた。

ドアの向うにはテレビみたいな画像があった。

そのときだった、ドアが急に閉まり出れなくなってしまった。

テレビに人が現れた。“みなさんこんにちは。今から下にある

マンホールに入ってもらいます。マンホールの下にはまたマンホールになっております。

そしていくつかのマンホールの下にたくさん宝物があります。

マンホールの中は迷宮になっており1度入ったら出る事ができません。

ただし、1番したにはエレベーターがありそこに着けば宝と共に  
だ出する事ができます。あなた方は選ばれた人たちなのです。

逃げる事はできません。そして迷宮の中には……”

テレビは消えてしまい、もうつかなくなってしまったのだ。

扉は開かずあるのは下にある大きいマンホールとライトが置いてあ  
っただけだった。

「みんな・・・行こう」

連が言った瞬間みんなはうなずいていた。マンホールは意外と簡単  
に開けられて、

中は真っ暗だった。中はとても暗かった。

連が先頭に立ってライトをつけ誘導していた。

しばらくまっすぐに歩くと宝箱見たいのがあった。

中身は銃が5本入ってた。連はビックリした。この銃は

本物なんだろうかと。銃や戦争などに詳しい健太に見てもらった。

「ありえない・・・本物だ。」

「本物が5つあるとしたら、銃で身を守れてことじゃないかな、  
しかも宝箱って、完全に司会者は遊んでいるようにしか思えない、

みんな、1人1つだ、無駄にするなよ、これは・・・命を懸けているんだ。」

連は冷静にみんなに伝えたつもりだがみんなは楽しんでいる。

そう、まるでゲームのように楽しんでいるが、こんなに甘いものではない事を・・・。

「とりあえず行くぞ」

「さて、ここは俺が先頭に立っていく、おれはこういうのが得意だからな。」

ライトを貸せ。」

健太はライトを連から取って先頭に立った。連は足がガクガクしてあまり歩けなかった。

そんな連を見ていた香奈は肩を貸してくれた。

連は顔が真っ赤になりドキドキしてさらに歩けなくなってしまった。

「あつた。あつたぞ。マンホール」

歩いて10分ぐらいだっただろうか意外に早かった。

連の緊張はほぐれた。何にもないって思い込んでしまった。

そしてマンホールの中に入った。

## 始まり（後書き）

やっと第2部に行きました。

どうでしたか？ちょっと期待はずれと思う人がいるかもしれませんが、私自身は

もっとも良いと思う作品にしようと努力していますので、次も読んでください。

## 傷（前書き）

不思議な扉に入った連と4人組は、不思議なマンホールへと向かう。  
その中は暗くて迷路のようだった。

そしてまたマンホールを見つけその下には・・・

## 傷

マンホールの中に入るとまた同じ迷路だった。

「よし俺について来い、大丈夫だ俺に任せろ！」

自信たつぷりの健太の表情はわくわくしている子供そっくりだった。なにがおもしろいのか連はサツパリ分からず健太についていった。歩いて数分で最初に分かれ道があった。

俺は右に行きたがったが健太が迷わず日誰に行ってしまった。

よく迷わずに左へ行けたもんだ、と連はものすごくムカついていた。左へ曲がってすぐに向こうからものすごく速くこっちに向かってきた。

健太は銃を構えて次の瞬間 “バーン” とものすごい銃声が迷路に響き渡った。

連はあまりの恐ろしさに立ちすくんでしまった。きずいた時には健太が犬を持っていた。

「こいつだな、結構大きいな」と冷静な表情でみんなに見せびらかった。

みんなは驚いた。腹から血が出てるのに関わらず、表情を変えない健太は恐ろしかった。

香奈は涙を流して泣いてしまった。香奈は動物を何よりも愛してた彼女には耐えられなかったんだろう、彼女はものすごく泣いていた。「し、仕方がないだろう、あきらかに俺たちを狙ってたんだぞ、食われるところだったんだぞ。」みんなは分かっていたがあまりにもきつかった。健太は犬をそっと置き次へと進んでいった。だが、連には何かおかしいと思ってた、健太の行動が。しかし今はそんな場合ではない、現に今も俺たちを狙ってきたのは事実だ。集中しなければ・・・死ぬ。

とそこで二つ目の宝箱があった。中には銃の弾とライトが4つあった。

それをみんなに配った。ライトが5つに増えたときは正直ほつとした。

1人1つずつライトが持てて銃の弾が結構増えた、これなら弾切れの心配はしなくてすむ。

しかし、みんなの目つきは変わった。そう楽しいゲームをする目じやなく獲物を狩る猛獣の目に、そして緊張しながら恐る恐る歩いていった。

“スタッスタッスタ”奥から足音が聞こえてきた。今度は犬じゃない、人のような気がする。

「おい、ライトを消して端っこに隠れる、銃を持って構えろ！」  
みんなは首を振ってライトを消した。一歩一歩向かってくるのが分かる、その分緊張も近づくにつれ心拍が上がってくる、口まで垂れ下がってきた汗がジヨッパイと感じる。

連の目の前に人が通った、2人いただろうか、暗くて分からないしかし、こつちもばれずに隠れられている。そして何もなかったように通り過ぎて行った。

その瞬間だった。連の目の前を通り過ぎた時に思わず銃を落としてしまったのだ

「いたぞ」との合図と共に銃声が鳴り響いた。連は思わず目をつぶってしまった。気がついたときには男が2人倒れていた。

「いたっ」気がついたら連の右肩に弾があたっていた。熱い苦しい痛い、連は倒れこんで肩を押さえて転がりだした。

大丈夫かと4人が駆けつけてきたがまだ痛い肩を見ると血がドバドバ出てきた。

連は気がついたら気絶していた。

「おい、連、連・・・大丈夫か？」

気がついたときには肩は痛くなかった。肩には布が巻かれていて血が止まっていた。

「連、大丈夫か、痛くないか」

と仲間の声がとても嬉しかった。

「な・・・なんで人が倒れていたんだ。誰が殺したの??」  
連は気になってどうしようもなかった。銃を落とした瞬間にやばい  
と思い目をつぶって

そしたら人倒れていたそして肩も・・・。

「健太がやったのさ」

と隆志が言つて香奈と真希が泣きながらうなずいた。

「やっぱりな、お前しかいないからな」

と笑つて健太にありがとうと言つてやりたかったが、方の痛みがい  
きなりきて

それどころじゃなかった。何とか立ち上がる事ができ、銃を片手に  
持つて「行こう」

とみんなに言った。

こうして次へと進んでいった。

## 傷（後書き）

え・・・とやっとう話にいきました。

次からは後書きを書くのをやめようと思います。

後書きより4話を期待してください。では4話を期待してください。

## お菓子（前書き）

鎌倉旅行で高德院に着いた連を率いる班は

なんと不思議な扉があった。そこには大きなマンホールがあった。

その中に入った連たちは順調に進んでいったが

連が銃で撃たれてしまった。

大ピンチになった連たちはこれからどうなるのか・

## お菓子

連は肩抑えながら進んでいった。

連は汗と荒い息で苦しそうな顔をしている。

みんなが連のことをちらちらと、ちら見をしてくるのが分かる。

だが、誰もが何もしてあげられない事を悔やんでいた。

健太や隆志は、話してあげたかったが汗と痛みに耐えている連に話す言葉はなかったのだ。

しかし、連には孤独に思えて仕方がなかったのだ。誰も気がついてくれない

こんなに痛そうにしても……。

だが、そのときに香奈が優しく話してくれた。

「肩、まだ痛むの？ハンカチを変えてあげる。」

香奈の言葉はとても嬉しかった。連は「ありがとう」と痛さに負けない笑顔で返事をした。

布だと思ってたのはハンカチだったんだと気がついた。連が気がついたときには真っ赤だったから全然気がつかなかった。

しかもよりによって香奈のものとはものすごく嬉しかった。

連はハンカチを変えてもらいピンクのハンカチは真っ赤になることはなかった。

だが、まだまだ痛みが続いた。

連のライトは弾が当たって壊れてしまったからみんなと離れたらまずいと思い、一生懸命歩き続けた。それから歩いて30分ぐらいだろうか、実際に連はものすごく長く感じた。

「あつたぞ、次へのマンホールだ。」

みんなは、はしゃいでいた。だが連はものすごく疲れていて倒れそうだった。

これに気がついた真希と香奈は「ちょっと休憩しようよ」と健太と隆志に言った。

「そつだな、俺たちも疲れてきたし・・・」  
とりあえず少し休憩する事にした。

「腹、減らない？」と隆志が言ってきた。  
連は時計を見るともう11時を回っていた。

空気が読めない隆志はみんなに睨まれた。

「お前つて本当に空気読めない奴だよな、俺気にしていなかったの  
に言われたら腹減るだう」

健太はがっかりしながら隆志に叱った。

「やっぱ減っているんだ、実は・・・」

と隆志はポケットからお菓子を取り出した。

みんなはお菓子を釘付けになった。

「それどうしたんだよ、バックは置いてきたはずだろう」

連は班長として隆志に怒鳴りつけた。

「まあまあ、欲しいんだつたら怒るのやめろ、それに怒ると血が出るぞ」

連は歯を食いしばり怒りを抑えた。

「じゃあ、何でお菓子が・・・」

「こつそり食べようとしてポケットに入れていたんだよ、まさかこ  
んな形で役に立つとは、思ってたなかつたよ」

連はがっかりしたが、結果的には助かっているので仕方がなく頭を  
下げて謝った。

「よかるう」と隆志はみんなにお菓子を配った。良くこんなにお菓  
子を持つてきたもんだと

ついつい感心してしまった。

「じゃ、そろそろ行くか、」

健太はマンホールをあけてみんなは中へと入って行った。

## 分かれ道（前書き）

鎌倉旅行で高德院に着いた連たちは

不思議な扉を見つけ、中にはマンホールがあつた。

その中には迷宮がずっと続いていた。

連は敵に肩を撃たれて重傷を負いながら先へ進むが、

お腹が空いた連たちは隆志からお菓子を分けてもらう事に……。

そして冒険が再会する。

## 分かれ道

マンホールの中は前と比べてもあまり変わらなかった。

連たちはいつも通り歩いていった。

歩いて数分ぐらいだろうか、二つの別れ道があった。

今回2回目の分かれ道であった。

連はどちらでも良かったが、みんなはそうはいかなかった。

喧嘩を始めたのだ。健太は左に行きたいらしく、隆志は右に行きたがっていた。

喧嘩は迷宮にこだまし遠くまで響き渡っていた。

ついにそれに怒った香奈と真希も止めに入ろうとしたが、逆に2人とも喧嘩に入ってしまったのだ。そんなときだった。誰かがこつちに走ってくるのが分かった。しかも運が悪く後ろから来たので速く逃げようとしたがまだ解決していなかった。

ついに二つに別れてしまったのだ。連と香奈と健太は左に行き隆志と真希は右へと行ってしまった。連は悪運の持ち主だろうか、左に誰かが向かってきた。連と香奈は逃げ切れない事を思った健太は、足を止め待ち伏せすることにした。3人は銃を構えて敵に向かって構えた。

「来た」との合図と共に撃ち合いになった。

今回は誰も傷つくことなく敵を殺せた。敵は1人だけで足と胸に当たっていた。

連は敵の銃を取り上げた。ものすごくかっこいい銃だった。みんなが持っている銃とは違い

健太によるとこれはライフルで連射が出来る銃だった。話し合いの結果、重傷だった連が銃を持つ事になった。ライフルは意外と重くて大変だったが、嬉しいほうが今の連には強かった。

ライフルは肩にかけることが出来たので当たっていない方の肩に掛けた。

連は気がついた。別れてしまった真希と隆志は大丈夫だろうか心配で連はしようがなかった。

「ねえ、一回戻って合流しようよ、お願いだから。」  
香奈も同じ気持ちだったんだろう、香奈は半泣きで訴えてきた。

「あのなあ、今戻っても追いつきはしないさ、それに行きたい方向に行っただから向うも」

別に困ってなんか居ないよ、いってもまた喧嘩になるだけだし」  
健太は顔を真っ赤にして香奈に怒鳴りつけた。

こんな健太は始めて見たので香奈と連は何も言えなかった。

「行きたいやつはすぐに奴の所へ行ってるよ。」

健太は静かにそう言い出して前へと前進しだした。

連は気にする事をやめてただ前を集中して敵より速く見つけることに集中した。

弾は前の銃と同じだったので弾の心配は要らなかった。

進んでいくと猛スピードでこっちに向かってくるのが分かった。  
人間じゃない事は確かだ。

「……犬だ。」健太は銃を構えて真剣に手で合図した。

“バウバウ”と叫びながら向かってきたのはやはり犬だった。

しかも結構大きく数も結構多かった。連はライフルで連射した。

一瞬にして犬の身体から血が大量に溢れてきた。

連は啞然とした。たった一瞬で犬が何匹も死んでしまった。

ライフルはかなり使える。狙った獲物は逃がさないとはまさにこのことだ。

だが全員死んだが、外れた弾も多かった。

弾が一瞬にして減ってしまったのだ。弾はまだあるが連射は禁物だ、なぜならもつと数が居たら弾を変える時間に殺されてしまうからだ。

これがライフルの弱点だ。

しかし、こんな危険なものを実際持っている自分が恐ろしかった。

全ての命を一瞬で滅ぼしてしまう自分が怖かった。

連はとりあえず肩に戻して先へと急いだ。

しかし、ライフルを撃った時のダメージは大きかった。

ライフルを連射するのはいいが、手や肩に負担がかかり方の傷口が開きだした。

連は肩を抑えて座り込んだ。

「大丈夫か連、休憩するか？」

健太は優しく声をかけてきた。

「いいよ、気にしないで先に進もう。」

連は痛みを我慢して歩き出した。

しかし連もさすがにきつくなつたので途中で座り込んでしまった。

「肩を貸そうか？」

上を見上げると香奈が手を出してくれたので

「ありがとう」と一言お礼を言つて肩を借りた。

連は出血が止まらなかつた。香奈に肩を借りていると何かドキドキして余計に歩けなくなつてしまった。痛みと緊張が連を邪魔をしてくる。

そしてそれから20分前後ぐらいでマンホールがあつた。

連は次の迷路はどんなんだろうか、もしかしたらこれで終わりだろうかかと期待していた。

そして期待をしながらマンホール空けて中へと入つていった。

## トラップ(前書き)

マンホールに入って分かれ道で喧嘩になった連たちは  
バラバラになってしまった。

そんな心配もしてられず、敵が連を妨げてくる。  
連たちの行方は……。

## トラップ

マンホールの中はいつもと違っていた。中は明るくなっていて、すぐそこにマンホールがあった。どうやら休憩ポイントのようだ。

中は広々としていて、真ん中には机とイス、それと袋があった。たぶん食料かなんかだと思った。

迷路じゃなく広い部屋みたいな感じだった。

連は袋に入っているのはやっぱり食料だった。パンと缶詰や水などその他色々あった。

それ以外に銃の弾や救急箱など品揃えが良かった。

イスや袋は5つあった。

連は隆志や真希にもやりたかった。と心のどこかで思った。

香奈も同じ事を考えていたのだと思う。

香奈の目には涙が今にも出てきそうだった。

しかし香奈は涙をこらえてイスに座った。

そして皆は食料に手をつけた。

無言の状態が結構続いた。

最初に話しかけたのは連だった。

これからの作戦や緊急事態にどうするかを皆で話し合った。

例えば、ばらばらになったときは銃で2発連続撃って合図するとか、道の方向は健太に任せるが、大事な判断や作戦では連を中心で行うことにするとか。

そしていつまで続くか分からないこの迷宮をどうやっていくかなどを決めた。

連は食料や水を半分ぐらいは残してそれを持って行くことにした。

もちろん、真希や隆志の分も一応持って行くことにした。

弾のセツティングや連の肩の治療などを行った。

よし、行くかと決心したときだった。

スピーカーかなんかで放送が入った。

「よく、ここまで来たね、君たち。だが二人はどうした？

もしかして仲間と二つに分かれてしまったのかね？ まあ、ここから先は今までより簡単じゃない。」

そう、レベルアップだ。健闘を祈る。」

この声は最初の時に聞いた声だった。

連の怒りはこみ上げてきた。どうしてこんな目にあってしまったのか、どうしてこんな危険な事になったのかは。

全て奴のせいだと連は思った。

行こう、の合図で連たちは次へと進んでいった。

中はいつもより暗く感じた。さっきが明るかったので目がなれず、先が全然見えなくなってしまった。

だが、前に進むにつれ、目がだんだん慣れてきた。

歩いてすぐだった。歩いているとポチツと音がした。なんだろうと下を見たら、カウントダウンが始まっていた。

3・・・2・・・1・・・ドッカーン。

下が爆発した。

そのとき連は怪我が無かったが少しでも気づくのが遅かったら完全に吹っ飛んでいた。

連はカウントダウンが始まる時、なんか分からないけど、やばいと反射的に慎二の足は前にでた。

その直後に・・・。連は出てきた汗が止まらなかった。心拍がものすごく速く、落ち着きそうも無かった。

連はただ、息を整えるので精一杯だった。

慎二はレベルアップの意味がやっと分かったのだ。

それはトラップ（罠）が仕掛けられていることだったのだ。

健太は連に大丈夫かと心配しながらこっちよって来た。

連は首を縦に振りまだ、息を整えていた。

「本当に連君は足を引っ張るのだから・・・。」

香奈は怪我が無いと分かった途端に胸を押さえてホツツと安心していた。

確かにこの迷宮を入れてから足を引っ張っているのは自分自身だと連は実感していた。

いつもは強気で足を引っ張っている連は今度、逆に引っ張られているとは……。

連は悔しかった。守ってやるべき人を守れず、逆に心配掛けられているのだと思うと悔しくて、悔しくて

たまらなかったのだ。結局表面だけの強がりだったのだと連は落ち込んでいた。

こういう時に足を引っ張っていかなくては……。

「ごめん、俺のことは心配しないで、先に行こう。」

香奈と健太はにっこりとうなずき、冒険が再会した。

連の肩の痛みは慣れか、治りかは、分からないけどあまり痛くなくなつた。

でも、香奈は心配そうに見ていた。

連は大丈夫と何度も言ったが、なんか心配してくれているように連は感じた。

連にとつては別に迷惑ではなく、むしろ嬉しい方だった。

でもなんか、香奈の事が気になり集中できなかった。

先頭の健太は手で待ての合図をした。

健太のライトの先にはまた、トラップがあった。

さつきとは違い何か上についていた。

付いていたのはカメラだった。健太は素早く手をカメラの視界に入ると

下の床が大きく開いていた。

中を覗くと竹やりが入っていた。

もし、気づかずにトラップに引っかけたら、体が穴だらけになっていた。

それを考えただけで寒気がした。

3人は穴をまたいで次へと進んだ。  
連はトラップ探しに集中していた。

トラップに引つかかると、死んでしまう可能性がものすごく高いと二つのトラップで

連は気がついた。

連は歩いて30分ぐらいかかっただろうか？

突然、銃声が聞こえた。

連たちは恐る恐る近づいていった。

そこには黒い男が2名いた。

その横には犬が倒れていた。

たぶん、犬が襲ってきて黒い男達が撃つたのだと思う。

健太が銃を構えた。次の瞬間、バタッと男達は倒れていった。

さすがの健太、丁度、二人とも胸に弾が当たっていた。

香奈は、耳を押さえて泣きそうになっていた。

仕方がないと思う、連だって血を見るのは怖かったのだ。

でも、連は自分の血が流れる方が怖かった。もし、これが俺達だったら……。

連は肩を見た。連は方の重傷ですんだが、少しでも間違えれば俺は死んでいた。と

時々思う。連は悲しく思う、どうして人を殺さなくてはいけないのか、連はずっと考えていた。

連は一度マンホールから出ようと思ったが壁に撃つてもびくともせず……。

連はこのままマンホールから出る事ができないと感じていたのだ。

永遠と続く迷宮、そして何回もマンホールに入っても続く同じ迷路そして、俺たちを邪魔する敵、そして最大の罠、トラップ。

連の精神面はもう破壊寸前だった。疲労と痛みと怒りと憎しみ。

もう、連はどうしてもよくなってきた。

だが、香奈は諦めていなかった。香奈は精神面が強い女の子なのは知っているが、

ここまで強いとは思わなかった。

相変わらず、健太は目を光らしていた。健太はすごいと思う。逆に俺たちが足手まといなのだろうか。

そんなマイナス思考の連はそんな事を考えながら歩いていた。

トラップの事が、頭から離れていたのだ。

ポチツと音がした。気がつくと思はれはスイッチを押していたのだ。それと同時にサイレンが鳴り出した。

敵が前と後ろから迫ってくるのが分かった。逃げる道はない。

絶体絶命のピンチが訪れた。サイレンは時間と共にだんだん大きくなっていく。

敵もだんだん近くなってくる。

身動きできなくなった。3人は賭けに出た。

前に突っ込んで敵を最初に殺す作戦だ。

これしかないと思つた健太はダツシユで前に突っ込んでいった。

3人は銃を構えて、今だ！と健太が言つた瞬間、射撃戦が始まつた。ズガガーン、敵は倒れていった、いや、まだ後ろからの追っ手が追いついてきた。

すぐに後ろに向いた3人は敵に撃つた。

「キャツ！」声を上げたのは香奈だった。香奈のわき腹を押さえていた。

「大丈夫か？」と香奈に向いた瞬間連の靴にかすつた。

そしてやつと銃撃戦が終つた。香奈のわき腹から血が出てきた。だが、擦り傷で済んだらしい、でも結構苦しんでいた。

香奈は救急箱から消毒液と包帯でぐるぐる腹を巻いていた。

その時だった、後ろの人が銃を持って連にめがけて撃つてきた。弾は外れたが、男は生きていた。健太が撃つてその男は死んだ。

死んでいたと思つた男が生きていたとなると、この中にまだ生きていた奴がいるかもしれないと思つた連は敵を見渡した。だが、生きていた奴はさっきの男だけだった。

「香奈、大丈夫か」健太と連は声を揃えて言つた。

「あはははは」と笑っていた。でも連には無理矢理笑っているとすぐに分かった。

でも健太はそうか、と一言で流した。連はよく一言で済ましたなと心の中で健太への怒りが芽生えて生きた。

連は香奈への好きな感情があったからそう思うだけかもしれないと必死で怒りを抑えた。

香奈は行こうと腹を押さえながら歩いていった。

連は香奈がこうなったのは自分がトラップを踏んでしまったからと思っていた。

連は不注意のまま歩き出したから……。

やっぱり足を引く張っているのは連だと自分を責めた。

香奈を傷つけたのは……。

連は歯を食いしばり、自分への怒りを抑えた。

連はイライラしていた。自分の気持ちをコントロールできなくなってきた。

そんな時、香奈がいきなり足を止めたのだ。香奈は「ゴメンね、連君、私つたら……。」

香奈はいきなりそう言って来て連に抱きついてきた。

「……怖いよ連君、どうしたらいいの？いつ帰れるの？」

香奈は泣き崩れた。連は優しく香奈を抱いた。

「帰れるさ……きつと……。」

連は考え直した。辛いのは俺だけじゃない、ここで頑張らなくては……。

連はリーダーとしての責任の重さを感じたせいで、気持ちが不安定になっていった。

だが、今はリーダーは関係ない、力を合わせてここから脱出するという気持ちが出てきた。

連の気持ちはスーッと楽になった。連は気持ちを入れ替えて先に進みだした。

そのときの健太の目は今まで見たことの無い恐ろしい目だった。



## 終りの時

連は、気を引きし直して、先へと進んだ。  
だが、おかしな点が一つあった。

それは、健太の行動だった。

健太はちらちらこつちを見てくるようになった。  
それが、普通の目じゃなく、敵を見る目だった。

連はそれから一度も健太を見ることが出来なかった。  
歩いて20分ぐらいだろう。

目の前から、音が聞こえてきた。

多分、一人でこつちに向かってくると思う。

連は銃を構えて向かってくる敵を待っていた。

だんだん迫ってくる音と共に緊張が上がってくる。

次の瞬間、銃声が鳴り響いた。

敵は素直に倒れた。

健太が敵によっていきなり、膝を曲げた。

「どうしたの？」

連は健太に近寄り、その先を見たら連は一瞬にして力が抜けた。

「そ・・・そんな・・・。」

その先には隆志が体から血を出して死んでいた。

右手には銃を持っていて、左手には胸を押さえていた。

多分、血を止めようとしたのだろう。

健太が手首を触り、口に耳を当てて息をしているか確かめていた。

健太が首を横に振った。

連は信じる事ができず、隆志の体によって、胸を一生懸命押した。

「死ぬな、死ぬな」と何回も繰り返して呪文みたいに唱えながら、一生懸命胸を押した。

その時、健太が涙をたらした。

だが、そんな事には気にせずただ、繰り返し、繰り返し、生き返

ることを願って連は胸を押しした。少しの希望をまだ捨て切れなかった。

「くそおおおお」

連は叫びだした。

手には真っ赤に血で染まっていた。

それから、連は泣き崩れた。

連は頭が真っ白になった。

だが、一つだけ考えられたのは、復讐だけだった。

連は立ち上がり、憎しみと復讐と言う気持ちだけが、連を動かしていた。

「皆死ね、だれだ、お前か、それともお前か。」

連は健太と香奈を睨みつけて銃を構えた。

「お前達だな」

連はそう言って銃を構えた。

「やめて……。」

香奈が泣きながら訴えかけてきた。

連はそんな事を気にせず、香奈に向かって銃を構えて、引き金を引いた。

「死ね……。」

銃声が鳴り響いた。

「あ……ああ」

香奈はそのまま倒れてしまった。

連は香奈を撃つてしまったのだった。

「おい、連、何している。」

健太が香奈の方へ駆け寄った。

連はただぼーと見ているだけだった。

「おまえ……よくも」

健太は連に銃を向けた。

「何故撃った」

健太は連を睨んで歩み寄ってきた。

「くるな、こっちにくるなあー」

連は健太に向かって銃を向けて引き金を引いた。

だが、健太はそれに動じることなく、こっちに歩み寄ってきた。

「くるなああああああああ」

銃声が鳴り響いた。

健太は仰向けになって悲鳴を上げていた。

だが、連は生きていると分かるとさらに引き金を引いて、

健太に向かって撃った。

連は何発も何発も、気がつけば弾が無くなっていった。

健太の体には血が溢れていた。

もう、すでに死んでいた。

連はやつと我に戻った。

皆が死んでいる。

連は怖くなつてそこから逃げ出した。

走って、走って走りまくって、

連は何にも考えずにただ、走り続けた。

その時、何かに躓いて転んだ。

それは、スイッチだった。

次の瞬間、サイレンが鳴り響いた。

敵が前後からこっちに向かってくるのが分かる。

連は逃げられない、銃の弾もない、なす術がない状態だった。

連はようやく平常心に戻り、連は静かに目を閉じた。

「これで、終わり・・・か。」

連の顔は死を恐れない、涼しい笑顔だった。

「いたぞー」

敵の声が響き渡り、ついに連の目の前まで来ていたのだ。

「これで、最後だな。」

敵の声が聞こえるが、連は目を開けなかった。

「みんな、ごめんな・・・。」

## 動機（前書き）

不思議なゲームに参加させられた連たちは  
仲間を殺してしまった。

連は逃げ出すが、捕まってしまった。

連は死んだのだろうか・・・。

## 動機

“・・・俺は死んだのか” 目を開けると眩しい光が差ししてきた。

目の前に誰かがいる、だが目が光に慣れなくてはつきりと見えない。だが、見たことのある顔だった。

「隆志・・・。」

目の前には死んだはずの隆志がいた。

あの時、殺したはずの隆志が何故？

そう考えると一つの考えが浮かび上がった。

「俺は死んで夢を見ているのか・・・。」

目が光に慣れた。

「動かない」

連の体には太い針金が手足を締め付けていた。

辺りは明るく、コンピユダーがぎっしりと部屋を埋め尽くしている。

「たか・・・し。」

連は力を振り絞って声を出した。

今までの疲労で声が全然出ない。

「よう、連。お前が何故ここにいると思うか？」

隆志の顔は微笑していた。

声が出せない、返事をしたいが口が上手く働いてくれない。

「・・・。連、お前にいいものを魅してやろう。」

左側のドアが開いた。そこに居たのは真希と担任の上田先生だった。

真希はともかくなぜ、先生が・・・。

再び隆志は口を開いた。

「お前が死ぬ前に全て教えてやろう。」

お前はここで死ぬ事になっていたのだよ。」

「何を言っている。」

3人の顔は恐怖を感じさせるオーラーがあった。

この顔が人間の顔とは言い切れない、むしろ鬼のような感じだった。「お前は馬鹿だな。今まで何にも気がつかなかったのは、お前は思っていたより頭は悪い。」

大体、最初に先生の言葉を覚えているか？」

連の頭には最初の映像が新鮮によりみかえった。

「高德院の大仏……。そしてそれに喰いつく真希……。」

連ははっと思つた。もしかしたらこれは……。

「さすがのお前でも分かるだろ？そうさ、これは最初からお前を殺すために立てられた計画なのだよ。」

連の開いた口は閉じなかつた。

しかし、何故3人は協力したのか、何故こんな迷宮が存在し、3人は知っていたのだろうか。

「何故俺たちがお前を殺そうと思つたか動機を教えてやる。」

「俺は奴に恋をした。そう、香奈に……。」

隆志は一呼吸を置いてまた喋りだした。

「しかし、香奈は何とお前の事が好きだったんだ。逆に俺はお前の事が大嫌いだ。」

ある日、俺は彼女があまりにもきれいで可愛かつたので、俺は告白をした。

しかし、彼女の答えは“ノー”だった。

俺は諦めず誰か好きな人がいるのか、俺の何処が嫌いなのかを聞いた。た。

そしたら彼女からの言葉のやり取りは無くなつた。

俺は彼女の事を諦めず、行動を観察した。

手にはメモ帳を手にとって……。

そしたら俺はあることに気がついた。

そう、俺が最も嫌いなお前の事が好きだったんだ。

俺は悔しくて、彼女にお前の事を聞いた。

しかし、彼女は一切話そうとはしなかつた。

俺はその事を先生に相談をした。

そしたら先生は何を言ったと思う？

先生は言っではいけないことを言ったんだ。

そう、私もお前のことが大嫌いだとね。」

連は驚いた。先生がそんな事を思っていたなんて、連は先生を睨みつけた。

そして話の続きを聞いた。

「それから先生と俺は話し合う回数が増えていった。

何回目だろうか、先生があることを言ってきた。

“真希が、連のことを好きだったらいい。俺は真希に連と香奈は両思いだ。”

と言ったらいい。それから気にする事の無かった真希に俺は接近して行った。

俺と真希は近い何かを感じる。そのうち俺達は両思いになった。

幸せだった。しかし、お前は俺と真希の心の傷つくつたのに、お前はクラスの学級委員になり、

幸せそうに生きている。頭はいい、運動も出来る、女子にもてる。

そんなお前が大嫌いだった。いつか復習をしようと思ってね、それがこれさ。」

隆志はポケットからナイフを取り出した。どうやら本気らしい。

「ちがう、お前は自分が香奈に振られた事を隠すためにそうやってきたんだ。

お前のしている事は許される事じゃないし、自分が振られたダメージを人に押し付けているだけだろう。」

連は力いっぱい声を出した。

隆志がそれに対して微笑んだ。

「そんな事は今だから言える。」

隆志はナイフで連の首を切った。

「痛いだろう、俺は本気だ。」

そうだ、この迷宮のことを教えてやるう。それは……。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7651d/>

---

マンホール

2010年10月28日05時14分発行